

新年聖書講筈

神の護り

2016年1月17日（東京 新宿）
奥田 昌道

神の護りの約束 初日の出と神社詣で 神さまの懐の中に 我なんじを贖えり キリストの十字架の贖い 白髪となるまで 鴨川温泉キリストの湯 恩恵と憐憫 われらの避所また力 千人は汝の左に万人は汝の右に 汝の足の石に触れざらんために なんじの憐憫 旧約の中の福音 キリストというプレゼント 独り子だけ 何のための十字架か 神さまの護り われ山にむかいて キリストとのコミュニケーション 主の祈り 悪しきものの手 御言の約束 永遠の生命 キリストの復活 見えないものを見つめていく 御言を然りと受けとる 祈り

神の護りの約束

バスツアーで若い方々の犠牲がありました、本当に心痛むかぎりですけれども、私たちの生活というのは常に危険にさらされている。昔に比べれば、ずいぶんいろんな科学やその他防災的な観点からの手立ても行われているはずですけれども、こないだのような事が起こってみたい、またトンネルの中を通っていると上から何か落ちてきたりとか、そういう不慮の災害が——人災ということもありましようけれども——とにかくそういうことは事実としてあとを絶たないというのが我々の現実です。諸外国を見ましても、いろいろなテロ的な事件が起こってみたい、あらゆる所で私たちの生活というのは危険に晒さらされている生活であつて、科学が進むから、文明が進むから絶対に大丈夫ということはありえないような状況です。

そういう危険を前にして、私たちはどのようにして日々を暮らしていけばいいのか。地震だということになれば、そのための対策がいろいろ公にもとられていきますけれども、そういう事前の対策とは別個に、私たち自身、自分の生き方として日々どのような気持ちで、どのような祈り心で過ごしていけばいいのか。そんなことについて、皆さんと一緒に考えてみたいという思いで今日のこの講演会を迎えました。

講演会の案内の中に、私は講師の言葉ということでごんなことを書きました。

《日本では元旦の神社詣でが行事となっており、新しい年の「無病息災」を祈願いたします。キリスト道ではどうなっているのでしょうか。神社詣でに負けないような「御利益」（神の護り）は約束されているのでしょうか。それを祈願することはだめなのでしょうか。決してそんなことはありません。聖書には、力強い「神の護り」の約束があります。これをしっかりと受け取り、力強く歩みたいと願っています。》

ます。》



私は日本に住んでいるれつきとした日本人でありますので——日本には外国の方もたくさんいらつしやるけれども——それぞれの国にそれぞれの文化、伝統というものがあります。私はそういった文化、伝統の中に生きながら、それを超えた更に奥深いものに迫りたいという気持ちでいる。

初日の出と神社詣で

除夜の鐘が鳴って、それから神社詣でもつをなさったり、あるいは山へ登って初日の出を拝む、ご来光を仰ぐとか、いろんなことを皆さんはなさいます。その奥にあるものを更に受け取りたいというのが私の気持ちです。

たとえばご来光を仰ぐ。これはやはり富士山にせよ他の山々にせよ、山の端からお日様が出てくるのを見ると、特に青空で晴れていますと非常にすがすがしい気持ちで、「ああ素晴らしいなあ」と、まさに太陽を拝みたいような気持ちになります。私も当然だと思えます。太陽というこの自然界の恵みなくしては地球というのは存在しえない。もしも太陽が存在しなかったら、この地球というのはないはず。ずっと悠久ゆうきゆうの昔からそれでやってきた。つまり地球というのは太陽に対して無条件に恵みを受けとるばかりで今日に至っています。

自然界は太陽によって命づけられている。その太陽の、もつと根源なる方は、キリストという本当の霊界の太陽である。ご来光を仰いで感謝するならば、それが表しているところの、もつと奥深いキリストという我々の霊界の世界、本当の根源世界、それにおいて燦然さんぜんと輝いて命づけてくださっているキリストという方に思いをいたしてほしい。

そういうことを私は、ああいったご来光を仰がれる山登りの方々の姿を見ていると、思い起こす。ということとは、ご来光を仰ぐ、それに祈るということを否定するのではない。それが示しているもつと奥深いものは、本当はキリストさまという、この宇宙界の、霊界の本当の太陽、愛そのものである太陽、これを知ってこれを拝み、その方の中に入れてもらって、自分も生命そのものになる。そこまで行ってくださいねという気持ちがある。

それから、神社詣でもつですね。除夜の鐘が終わってから、いろいろなさつているうちに夜が明けてくる。そうしたら、お宮さん参りを。明治神宮なんか皆さんはよくいらつしやるそうです。それを否定するのではない。

「我々にとつての神社詣では何でしょうか」

と、こういう発想です。私たちにとつての神社詣でとは何か。いや、そもそも何のために神社詣でなさるんですか。社寺に行かれるのは、やはり、

「この一年を無病息災で過ごさせてください、この一年をどうぞお護りください」

という、護りを祈願しているはずなんです。商売の神さまのところに行かれる方は、「商売がうまくいきますように」という、そういうこともあるでしょうけれども。まずは年の初めに、この一年をどうぞ無事に無病息災でいろんな危険からお護りくださいと、それぞれ



の神社仏閣にお参りなさるのだと、私は思う。

それでは、クリスチャンはどうなのか、クリスチャンはお参りしないのか。いやいや、そんなことはありません、クリスチャンもお参りします。私たち京都の集会では、いつも元日の午後2時から4時までお祈りの会をやっています。その時に私は言うんです、

「我々は負けない。世間の方々が夜明けから神社参りをなさる、それに負けてはならない」

と。なにも勝ち負けではないのですけれども。

「汝らの義、学者・パリサイ人びとにまさらずば」

とキリストは言われました。それをもじって、あなた方の信仰心、お祈りの心が、そういう世間の方々が神社仏閣に朝早くからお参りなさる、それにクリスチャンが負けていてグーグー寝ていたらどうするんだいと、そういう気持ちなんです。

神さまの懐の中に

では、私たちは本当に、お祈りしてお護りを願うことはゆるされるんですかと。そんな自己保身の――いや、「御意みこころが成りますように」と、これは立派なお祈りですよ――ところが、

「私の身をお護りくださいと、そんなエゴイステイックな祈りをしてよろしいんですか」

と、非常に良心的なクリスチャンの方はそういうふうにお考えになりますよ。いや、いいんですよ。ちゃんと護りを祈るといふことはいい。

福音書を見たらどうだろうか。福音書の中にそういうことが約束されているのだろうか。実は福音書を見たら、あまりそういうことは出てこない。福音書の中で非常にそれに関わりの深い箇所は、イエス・キリストのお姿、あの嵐のガリラヤ湖の中でキリストは舟板を枕にスヤスヤ眠っておられた。小池先生の講筵録の中に「イエス眠り居給う」という題の話がある。つまり、弟子たちは、

「先生、大嵐でこのまま放っておいたら、水が舟の中に入りこんで転覆して大

変なことになりますよ!」

と言って、眠っているイエスを揺さぶっていた。そしたら、キリストはどうでしたか。マタイ伝8章23節から、

「²³かくて舟に乗り給えば、弟子たちも従う。²⁴視よ、海に大なる暴風あらしおこりて、

舟、波に蔽おほわるるばかりなるに、イエスは眠りい給う。

この姿ですね。

²⁵弟子たち御許みもとにゆき、起して言う『主よ、救いたまえ、我らは亡なぶ』
人間的に見たら、

「もう大変だ、先生、寝ている場合ですか。我々は溺れて死んでしまいます。先生、



冷たいね、放っておいて私たちを見殺しですか」
 というのが弟子たちの心です。ところが、

26 彼らに言い給う『なにゆえ臆するか、信仰うすき者よ』

「なにをゴタゴタしているのか、神さまの護りの中にいるではないかと、これがキリストの答えなんです。」

「海だ波だと言う以上に神の力強い護りが私を守っているから、この舟は転覆しない。大丈夫だ。そんなことが君たちはわからないのか」

と。そういう、イエスはむしろ呆れ果てておられると言いたい。つまり、そのくらいイエスという方は神さまの懐の中に安らつて、護りを信じぬいて、それが言葉ではなく事実でもって表しておられる。その姿に我々は驚く。我々は弟子と同じですから、

「先生、こんなで大丈夫ですか、危ないじゃないですか」

と言つて揺さぶっている。それに対して、

乃ち起きて、風と海とを禁め給えば、大なる風となりぬ。27 人々あやしみて

言う『こは如何なる人ぞ、風も海も従うとは』(マタイ8・23〜27)

と。まず弟子たちには、びっくりすることばかりが起こっている。教えになにか驚嘆したというよりも、このイエスという方のなさること、お姿、生きさま、そういうものに弟子たちはたえず戸惑いつつ驚いているということが言えると思います。このようにして、イエスご自身は神の護りを信じきつておられるから、どこにいらつしゃつても、

「自分は神のみ懐の中にいるんだから大丈夫」

と言われる。ところが、弟子たちはなかなかそこまでいかない。

私たちはどうなんでしょうか、皆さんはどうでしょうかと、ということになってきますが。

我なんじを贖えり

私はご案内の文章の中にいろいろ御言を列挙いたしました。実は福音書そのものにはあまり神の護りそのものに関わるところは出てこないけれども、旧約聖書の中に、特にイザヤ書というところに非常に著しい言葉がたくさん出てきますので、少しそれをたどってみたいと思います。

イザヤ書というのは、特に40章以下の「第二イザヤ」と呼ばれている所、それから56章以下の「第三イザヤ」と呼ばれている所では、イスラエル民族に対する非常な祝福の約束がある。それは、イスラエル民族というものとイエス・キリストという将来出てきてくださる救い主と、それが重なり合っている。だから、イスラエル民族に対する祝福は同時に、イエス・キリストに対する祝福であり、預言であつたりする。あるいは、イエス・キリストのことを預言している。それが同時にイスラエルの民に対するまた預言であり、祝福であるという、そういう二重構造になっています。



そういうことで、ちよつとイザヤ書の43章から見えていきたいと思います。私たちがこのイザヤ書を読む時には、それを自分たちに当てはめればいい。

「あれはイスラエル民族に語られたことだから自分たちに関係ない」ということではなくて、

「イスラエル民族にあのように約束されたことは、今、キリストによって私たちに對する約束となつて成就している」

と、そういうふうを受けとつていく。そういう受けとり方です。

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此かくいい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言い給う。」

だいたい、いつも繰り返して、詩の形をとつていて、同じことを二回言い換えて言ってます。その出だしが、

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此かくいい給う。あなたを創つたのは私ではないか。その私があなを見捨てて放つておくなんてことはありえないではないか」

と。そういう心意気なんです。

おそるるなかれ、我なんじを贖あがなえり。我なんじの名をよべり、汝はわが有ものなり。

「我なんじを贖えり」と。つまり、神の前に立てないイスラエル民族。裏切りつばなしで、いつも神さまから叱られてばかりいたイスラエル民族。でも、

「その贖いはもう私はなし遂げたよ」

と。これは将来、イエス・キリストという方を通して成就するけれども、それを「もうなし遂げたよ」と言わんばかりの言い方です。

「我なんじを贖えり」

と。そうなんです。「贖い」というその御業みわざなくして、民は神さまに近づけない。罪ある者汚れたる者、不信仰なる者、それはそのままの姿では神の前に出られない。そこには必ず贖いというか、その赦しとか、何かそういったものがあつて初めて神の前に出て礼拝することができると。そういう感覚なんです。

キリストの十字架の贖い

私たちにとつても、キリストが十字架で贖いを全うしてくださった。ただ一回きり、未来永劫に過去・現在・未来の全部を引き受けて、キリストが十字架にかかつてくださった。だから、私たちは常にもうダイレクトに神さまの前に出られる。キリストの中でお祈りもできます。

ところが、イスラエルの民にとっては、やはり贖いというものを通らないと、神さまの前に出られない。それに対して、神さまの方が、



「もう贖ったよ」

と、先取りして仰っているわけです。しかも、

「あなたを創ったのは私ではないか。あなたはどこからか蛆虫のように湧いて出たのではない。私があるあなたの創造主だ。あなたに生命を与えた。そういう創造主だ。創造主は創った者を決して忘れていない。あなたたちは背いてばかりだから、時には審きも下した。禍害にも遭わせた。試練が臨んだ。しかし、それは私の本当の意ではない。あなたたちを救い上げたいんだ」

と。そういう気持ちがあります。ですから、

「ヤコブよ、なんじを創造せるエホバいま如此いい給う。イスラエルよ、汝をつくれるもの今かく言給う。おそるるなかれ、我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり、汝はわが有なり。」

と。そして、

「なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火中をゆくとき焚かるることなく、火焰もまた燃えつかじ。我はエホバ、なんじの神イスラエルの聖者、なんじの救主なり。」

と。こんなふうには、

「あなたが火の中を行こうが、水の中を行こうが大丈夫だ。たとえ水が頭の上を越えていくことがあっても、あなたは水中にあつてちゃんと守られているから大丈夫だ」

と。こういう御言が、あの東日本大地震の津波の時にも民に語られていたならばと思うんですけれども。私は、ああいった災害の場合でも、やはりちゃんと神の救いの御手は及んでいると信じています。

「たとい身体は大水害によつて奪われ、自然の命は奪われましても、霊は生きています。霊魂は必ずキリストの御腕の中に抱かれて天上に昇って行っている」

と、私はそう信じております。既にこうやってイザヤ書43章に、

おそるるなかれ、我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり、汝はわが有なり。
なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火中をゆくとき焚かるることなく、火焰もまた燃えつかじ。我はエホバ、なんじの神イスラエルの聖者、なんじの救主なり。
……われ見てなんじを宝とし尊きものとし亦なんじを愛す。(イザヤ43:1-4)
おそるるなかれ、我なんじと共にあり」

と。こういう素晴らしい約束が43章の1節から4節に出ていますからね。



白髪となるまで

それから更に、今度はちよつと違う角度ですけれども、イザヤ書46章に、

「³ヤコブの家よ、イスラエルのいえの遺れるものよ、腹をいでしより我におわれ、胎をいでしより我にもたげられしものよ、皆われにきくべし。

イスラエルの中の遺れる者——いろいろ不信仰のために滅びた人たちもいたけれども、その遺れる民——は、実はあなた方がお母さんの胎を出した時から、私はちゃんとあなた方を守ってきたんだよと。

⁴なんじらの年老いるまで我はかわらず、白髪となるまで我なんじらを負わん。

我つくりたれば擡ぐべし、我また負いかつ救わん。」(イザヤ46・3〜4)

と。要するに、

「あなたを創つたのは他ならぬ私だ。あなた方はお父さんとお母さんから生まれてきたが、でも、その奥に本当はあなた方を産み出したのは私なんだ。私があなたたちを産み出した以上は、あなたたちは私の子どもだ。あなたの運命に対して私が責任を持っているから大丈夫だよ」

と。とにかく、イスラエルはちつぽけな民族です。周りは外敵で、何か折りがあつたら攻め込んでそれをやつつけようという、そういうった昔の時代です。そこで、

「心配するな。わしがついているではないか。大丈夫だよ。あなた方の年寄るまで私は変わらない。白髪となるまで私はあなたを背負っていく。私は創つたのだから、

創造主だから、あなたたちを背負っていくよ」

と、そういう約束がここにあるわけです。

こんな御言を全部、私は自分にいただいている。私も白髪になってきました。昔は紅顔の美少年でしたけれども(笑)。髪の毛は黒々、垂直に立っていて、動物でいうと、まるでハリネズミやヤマアラシみたいな感じだったけれども、今はもうこういう実にかわいいお爺さんになりました(笑)。白髪となるまで、しかし、変わらないのは神さまの顧み、神さまのお護り、これは変わらない。

私は、たとえどんなことになりましたでも、必ずちゃんと行く場所がありますから。「終活」というんですか、終わりにどこかへ行く、その場所を求めているいろいろ予約をなさることが終活らしいけれども。私なんかはもう予約もちゃんとできあがついて、向こうでちゃんと所を備えて待っていていらつしやるキリストがいてくださる。その他、主にあつて召された者たちがみんな向こうで見守つてくれている。

「その代わり、あなたは地上に在るときはしつかりやれよ。地上で変な息抜きしたり、手を抜いたらいかんぞ」

と言って、天上の応援団がやかましいんですよ。だから、私はいくつになろうと、やはり完全燃焼しないと向こうへは行かないという、そういう気持ちでやっています。今だって、



皇居の周りを走っているんですよ。先日の金曜日にも寒空の下でちゃんと一周走ってきました。42分もかかってしまいましたけれども。

やはり、私たちに活力をくれるもの、どこから何か力が湧いてくる源になるもの、それはキリストの生命です。それが来ているから、常に内側は安らかであるということ、それから、活力が湧いてくるということ。聖書のお話をするに当たって、お説教ではない。「これは本当です。本当にこれで私は生きています。これが一番確かなんですよ」と言いたい。見えるものは崩れていく、消えていく。しかし、見えないものは永遠です。その見えないものに私たちは絶えず触れていく。キリストの姿も見えません。み言葉も見えません。でも、その見えないみ言葉の奥にキリストが光っていてくださる。見えない主さまが、キリストがいつも、

「私はあなたと一緒にいるから大丈夫だ。私はあなたを護っているではないか。何が来ようとも大丈夫だよ」

と。そういった保証をキリストはくださっております。それは皆さんであつても同じですよ。私と皆さんはなにも変わることはない、私は思います。神さまは依怙えこひいきなさらぬから。ただ、断つたらいかん。神さまは非常に慎み深いお方です。無理やりに押しつけない。神の霊、キリストの霊は本当にそういう慎つつましやかな霊です。

「どうぞおいでください」

と言って、おもてなしの心で受け入れないと、その霊は入って来てくださらない。だから、傲慢な人間とか、ふんぞりかえっている人間のところへは、その霊は訪れない。

「どうぞ、来てください。お願いします」

と言って懇願するところへは、

「そうか、入っていいのか」

と言って入ってきてくださる。そういうお方だと私には思えるんです。

それから、イザヤ書49章10節です。

「¹⁰かれらは飢えずかわかず、又やけたる砂もあつき日もうつことなし。彼等をあわれむもの之をみちびきて泉のほとりに和やわらかにみちびき給うべければなり。」(イザヤ49・10)

これは将来の姿ですけれども、そういう預言があります。

鴨川温泉キリストの湯

それから、詩篇23篇。これは非常に有名なところで、皆さんはご存知だと思いますが。

「エホバは我が牧者なり。われ乏しきことあらじ。²エホバは我をみどりの野にふさせ、いこいの水浜みぎわにともないたもう。³エホバはわが靈魂たましひをいかし、
名のゆえをもて我をただしき路みちにみちびき給う。」(詩篇23・1〜3)



昔は、「ヤハウエー」の神さまのことを「エホバ」と呼んでいましたから、文語訳聖書では「エホバ」とあります。口語訳聖書ではみんな、「主」に置き換えています。まあ、どちらでも結構です。とにかく、旧約の人にとっては、エホバの神さまは審きの神さまであると同時に、生命をくださる神さまでもあった。それをこの詩篇は、

「エホバは我が牧者なり。われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野にふさせ、いこいの水浜にともないたもう。」

と。我々にとってはキリストです。

「キリストは私の牧者。私はキリストが居てくださるので何も乏しいことはない。

キリストは私を緑の野にふさせ、いこいの水浜にともないたもう。」

いや、私にとっては、

「キリストこそは我にとりて緑の野、いこいの水浜」

と、こう読むんです。キリストこそは我にとりて緑の野、いこいの水浜であると。

私は、京都の私たちの集会場を——二年前に出来上がったわけですけども——そこを何と呼んでいるかというところ、

「鴨川温泉キリストの湯」

と呼んでいる(笑)。いいでしょ。鴨川という川のほとりで湧き出た温泉であって、キリストの湯と申します。

「人生の旅で疲れた旅人よ、どうぞここへ来て安らぎ憩ってください。そしたら、内側から生命の力が溢れ出ますから、どうぞいらつしやい」

と。そういう看板までは出していませんけれども。「キリストの湯」なんて言ったら、本当にこれは温泉かと思つて訪ねて来る人があるといけませんからね(笑)。でも、気持ちはそうなんです。「鴨川温泉キリストの湯」という。そういうことで、私にとっての詩篇23篇は、そういう形で京都では実現しております。

しかも、それは私の魂を活かしてくださる。

「³エホバはわが靈魂をいかし、名のゆえをもて我をただしき路に導き給う。」

と。「御名のゆえをもて」ということは、「御意であるから」ということで、

「私が正しくあらせていただくのは御意がそうだから。御意にかなうから、私はそういうあり方で導かれて参ります」

という気持ちです。そして、

⁴たとわれ死のかけの谷をあゆむとも禍害をおそれじ。なんじ我とともに在せばなり。

さつき、

「水の中を行こうと、火の中を行こうと、それでも大丈夫。神の護りはちゃんとあるから大丈夫だ」



と。そういうのがこの詩篇23篇のところです。そして一番最後には、

6 わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。我はとこしえにエホバの宮にすまん。」(詩篇23・3〜6)

と。この地上に生をいただいているあいだ、必ず恵みと憐れみがわれにそいきたらんと。

この「恩恵と憐憫」というのはヨハネ伝1章17節のところに、

「17 律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。」(ヨハネ1・17)

というところがあります。あれを思います。律法というのは、これは因果応報です。

「あなたはけしからんことをやっているから、こういう処罰がある。あきらめな。

本当に神に祝福されようと思つたら、神の御意を行いなさい」

と。誰も行えない。そしたら、その行く先は処罰なんです。それが律法の世界ですよ。

我々の法律だつてそうでしょ。犯罪は、こういうものが犯罪だと。それに該当することをやつたら、必ず司直の手が回つて、そしてまず容疑者にされ、裁判にかけられ、最後は刑の執行という、このお決まりのルートがあります。神さまの眼から見たら、みんなお決まりのルートに放り込まれるものばかりなんですよ。誰も神の前に、

「自分は正しいです」

なんて胸を張れるようなのは一人もいない。それがモーセの世界でした。ただうなだれるばかりなんです。それに対して、

「恵みとまことが来た」

という。「恵み」とは何かというと、

「あなたが立派な人間だから、だからしてやる」

という、因果の世界ではない。理由がないんです。ルカ伝15章の「放蕩息子」の話もありますが、無条件に相手を抱き取つてしまう。

「そんな無条件に抱き取ると言つたつて、義という点は、審きという点はどうかつているんですか?」

「審きは私が引き受けたから」

と。それがキリストの心です。我々の側のマイナスは全部、自分(キリスト)が吸い込んでくださつて、プラスである生命だけをくださるといふ、こんな有り難いお話というものがあるでしょうか。

恩恵と憐憫

私は本当に思うんです。特に京都なんていう所は、伏見稲荷大社というのがありまして、お正月の三が日くらいにものごくたくさんの方がお参りに行かれるそうです。たくさんお賽銭を捧げられるそうです。あと、銀行の方々が一週間かかつてそれをずっと勘定して



今回の――まあ、売り上げ高とは言いませんが――お賽銭はこれだけでしたということ公表なさるといふ。たくさん行かれるんです。それが京都の伏見稲荷大社です。それから、大阪の方では恵比寿神社にたくさんの方がお参りに行かれる。これも商売繁盛です。我々の社会の民間信仰というのはいささかそういうものなんです。けれども、キリストの方は、

「御名のゆえをもて我をただしき路にみちびき給う」

という。金が儲かるなんて全然約束されていない。つまり、神の心を我々にくださる。

「神の御意に従った生き方をしなさい」

と。これが神の願っていらつしやることです。でも、それなら、我々はたえず貧乏でピーピー言っているのかと。そんなことはない。キリストの約束は、

「まず、神の国とその義を求めていきなさい。神の御意を求めなさい。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる」

と。ひとりでに転がり込んでくる。まず神の国、御意、それに自分を献げていけば、必要なものは全部ちゃんとそこに伴ってくる。随伴するということ。これがキリストの世界です。

だから、あくせくとお金儲けに専念する必要はないですよ。御意に合う生き方をしていけば、あとは神さまの側で責任を持ち給う。詩篇にも出てくるんです。

「昔から正しい人が貧乏して、お金を恵んでくださいと言って頼み回っている

姿は見たことがない」

と、ちゃんと詩篇に出てくる。神さまは我々に、神の御意を求めていく者に決して恥をかかせ給わない。世間の人があのようにいろんな御利益をいただいているなら、

「私だって絶対に彼らを祝福せよんばやまじ」

と、絶対に競争してくださると思えます。でも、必要以上のものはお与えくださらない。必要なものを必要なときにくださる。そんなことです。貯金とかそういうものはあまり向かないのかも知れませんが、でも、本当に必要なものを必要なときにくださる。それが、神さまは我々に対して、単に災いといったものからの護りだけではなくて、経済生活やいろんな面できちんとして私たちに必要なものは与えてくださる。そういう世界です。そして、

「わが世にあらん限りはかならず恩恵と憐憫とわれにそいきたらん。」(詩篇

23・6)

地上にあるかぎり、かならず恩恵と憐憫とが追っかけてくる。まず神さまを求めていけば、そこに恵みと憐れみが追いかけてきて、捕まえて包んでくれるという、そういう心をこの23篇は謳っています。

われらの避所また力

それから、23篇の倍は46篇ですね。これはルターが大好きだった、

「神はわれらの避所また力なり。なやめるとき最ちかき助けなり」



という有名なところですよ。この一句だけでも心に刻んでおいてください。

「^{さげどころ}避所」という。つまり、逃げ込める隠れ家である。逃げ込んでよろしいよと。しかし、逃げ込んだら、そこから力を与えられる。単に逃げ込んでいるだけではない。逃げ込むことによつて、そこで力をいただいたいて、もう一回活力が湧いてきて、そして頑張ることができるといふ。そういうのが、

「^{まげあひう}神はわれらの避所また力なり。

ということ。そして、

なやめるとき^{いと}の最ちかき助けなり。

と。悩みのない人なんかありませんね、この地上で。悩めるときにどこにお願いするかという、まさにキリストご自身です。私たちにとつてはキリストご自身。そこに何事も全部持つて行くということですよ。

^{もなか}2さればたとい地はかわり山はうみの中央にうつるとも我儕^{われら}はおそれじ。³よ
しその水はなりとどろきてさわぐとも、その溢れきたるによりて山はゆるぐ
とも何かあらん。

そういうまるで、あの地震や津波のときの現象を先取りしているような言葉です。

⁴河あり、そのながれは神のみやこをよろこばしめ、^{いとたかきもの}至上者のすみたもう
^{せいじよ}聖所をよろこばしむ。⁵神そのなかにいませば都はうごかじ、神は朝つとに
これを助けたもう。」(詩篇46・1〜5)

ちゃんとそこに、そういう神の護りというのは確かですよということが、この詩篇46篇で約束されています。

千人は汝の左に万人は汝の右に

それから、詩篇91篇という詩篇。これは私にとつて若干躓^{つまず}きになつていたんですよ。皆さんはどういうふうにお読みになつているか知りませんが。これは素晴らしいところですよ、どこに私が引つかかつたかということを申し上げたいと思います。

「^{いとたかきもの}1至上者のもととなる隠れたるにすまうその人は全能者の蔭^{かげ}にやどらん。

要するに、さつきの46篇と同じように、

「^{みつばきの}神さまを避所にしてそこへ逃げ込んでいる人、これはその御翼の陰に護られてい
るのだから大丈夫です、安心していいんですよ
ということを言っている。

²われエホバのことを宣^{のべ}て、エホバはわが避所^{まげどころ}わが城わがよりたのむ神なり
といわん。

神さまこそ私の避所であり、城であると。城というのは、日本はよく大名が城を造ります。



江戸城とか、大坂城とか、姫路城とか、いろんな城がある。何のための城ですか。やはり、敵が攻め込んで来たときに守るための城です。その城には必ず前にお堀を造る。外堀があり内堀があり、それからお城があつて、そしてそこから矢や鉄砲玉が飛んでくるような造りになっている。そういつたものが城です。隠れ家であると同時に攻撃と、相手が攻めてくるときにそれに防衛するという、そういう城です。この全能者を自分の隠れ家としている人は、

「わが避所、わが城、わがよりたのむ神」と高らかに宣言する。

³そは神なんじを狩人のわなと毒をながす疫癘よりたすけいだしたもうべければなり。

疫病から助けてくださる。

⁴かれその羽をもてなんじを庇いたまわん。

つまり、御翼の陰に護り給うということ。

なんじその翼の下にかくれん。その真実は盾なり干なり。⁵夜はおどろくべ

きことあり、昼はとびきたる矢あり。⁶幽暗にはあゆむ疫癘あり、日午にはそ

こなう勵しき疾あり。されどなんじ畏るることあらじ。

と。いろんな災いや病気もある。いろんなそういった災いが満ちているけれども、それはあなたには近づかないから大丈夫だ、神の護りの中にありますよ、ということが言われている。私が躓くのは次です。

⁷千人はなんじの左にたおれ万人はなんじの右にたうる。されどその災害はな

んじに近づくことなからん。」(詩篇91・1〜7)

ここなんです。やはり、私は千人も万人も倒れてもらったら困る。私だけが救われたらいいというのではない。私だけは安泰だ、そこらのやつはみんな滅びてもいいなんて、そんな薄情なことは私は言えない。皆さんはいかがですか。

「千人は倒れ万人は倒れる。ああ、おもしろいな。私だけは護られている。万歳！」

なんて、そんな薄情なことは私は言うわんですわ。皆さんはいかがですか、ここを読んでいる。いや、昔の人はやはり不信者の中に、あるいは神に逆らう者の中にいてあえていた。だから、そういう人たちがたとえ倒れることがあっても、あなたは大丈夫だと。そういう気持ちを言いたかったんでしようけれども、現代においては、あまり私はこういうことを言いたくない。

「千人は汝の左に倒れ、万人は汝の右に倒れる。されどあなたは大丈夫だ」

「いや、千人も万人も救ってやってください。神さま、お願いしますよ」

というのが私の気持ちです。



汝の足の石に触れざらんために

それから、9節にいきますと、

「9 なんじさきにいえり、エホバはわが避所なりと。なんじ至上者をその住居となしたれば、10 災害なんじにいたらず、苦難なんじの幕屋に近づかじ。」

これはさつき歌った「山辺に向かいて」(讚美歌301番)という歌と共通のところがありませんね。
「そは至上者なんじのためにその使者輩におおせて、汝があゆむもろもろの道になんじを守らせ給えばなり。」

これなんです、護りです。至上者、神さまがあなたのためにその神さまの使いたち、天使たちが——神さまの「使者輩」というのは天使たちです。あるいは、我々にとっては先に召されて向こうに往った者たちが今度は天使となつて働いている——いろいろ、神さまの御意を受け継いで、

「そういういた者たちが、あなたが災いにかかろうとする時にちゃんと護ります。先回りしてちゃんと護つてくれるから、大丈夫だよ」

と、そういうことをここで宣言している。

「11 そは至上者なんじのためにその使者輩におおせて、汝があゆむもろもろの道になんじを守らせ給えばなり。」

と。この言葉はしつかりと受けとつていただきたい。そして更に、

12 彼ら手にてなんじの足の石にふれざらんために汝をささえん。

具体的に、たとえば崖の下へ転落しそうに、滑つて落ちそうになつた時、あるいは落ちた時だつて、

「天使たちがちゃんと護つて、あなたが怪我をしないように、命を失わないようにちゃんとやってくれるから大丈夫だよ」

と。そういう約束があるわけです。

「彼ら手にて、あなたの足が石にぶつかつてそして怪我をしないように、あなたを支えてくれる。そこまでの護りがあるんだよ」

と。これをサタンはキリストに使つたんです、あの曠野の試みのときに。キリストが高い所に行つて、

「塔の上から飛び下りてごらん。サツと天使が来て、あなたを支える。そしてら、人々はアツと驚いて、これこそ本当に神の子だと言つて、みなあなたを讚えるでしょう」

と言つて、サタンはキリストに誘いをかけた。その時にキリストは何と仰つたか。

「神を試みてはならない」

と。神の約束がこうあるから、この約束が本当かどうか試してみようかと、自分から飛び下りる。そんなことは絶対にしてはならない。神さまをテストするなんて、そんなこと



は絶対にいかん。そうではなくて、御言みことばがあれば、信じておればいい。そうした時に、たまたま自分が失敗して足を滑らせた時に、そういう足を滑らせた時に護つてくださる。しかし、

「護つてくれるんだから、高い所から飛び下りてやろう」

なんて、そんなことは絶対にやってはいかん。これはよく心得て下さいね、皆さん。クリスチャンは不注意でいいのか。そうじゃない。やつぱり、クリスチャンは注意深く行動しないとイケない。注意深く行動していても、なお足を滑らせることはいくらもありません。我々は失敗はいくつもあります。そういう心ならずも犯してしまった失敗を、ちゃんと神さまは後始末してくださる。でも、

「神さまがついているからズサンなことをやっていいや」

と、そういう投げやりなことは、我々は職業においても、近所付き合いにおいても、どこにおいてもやってはいけません。そこは大事なことから、心得ていただきたい。でも、こういう約束がある。しかも、

13 なんじは獅ししと蝮まむしとをふみ、わかじし 牡獅と蛇とを足の下にふみにじらん。」(詩篇91・

9~13)

だから、そういった自然界の猛獣とか、そんなものでさえお前に征服されるんだよと、そのようなことが言われています。

これに関して思い出すのは、あのアッシジのフランチェスコですね。狼が人を喰ったりして被害が絶えない。そこで、フランチェスコは狼に、

「兄弟、狼よ」

と呼びかけた。狼はなついたというんですね。「あつ、この人は強いな」と思って、あの荒い狼でさえアッシジのフランチェスコの愛にふれて回心したという。そのくらいにやはり本当にキリストの似姿になっている人は凄いと思います。キリストは皆さんお一人お一人を自分の似姿につくろうとなさっている。創世記によりますと、

「人は神の似姿に、神の姿になぞらえて創られた」

とあります。その似姿は何かというと、信頼、信、希望、愛、こういった内的なものだと思います。「神の似姿」というのは。それはあのコリント前書13章で、

「愛は寛容にして慈悲あり……」

と、ずっとありますね。ああいった姿、あれが神の心なんです。そういう心を持ったものとして人間をお創りになったんだけど、人間は反逆心を起こして、神さまとの縁が切れてしまった。楽園喪失で追放された。それからいろんな不幸なことが始まってきたというの、あの創世記に書かれていることです。あれは確かに真理をついています。

我々は生命の源である神さまとの縁がプツンと切れたら、もう闇なんです。太陽がなかったら闇なんです。太陽があつて地球は輝いている。太陽がなければ地球というものは死ん



でしよう。同じように、神さまという生命の源と私たちがプツツリ縁が切れてしまえば、独立宣言したって、これはもう滅びへの道でしかないということなのです。

なんじの憐憫

今、「足を支える」ということが出てきましたから、それに関連して詩篇94篇の17、18、19節あたりを見ます。

「もしエホバ我をたすけたまわざりせば、わが靈魂はとくに幽寂所に住いしならん。」

つまり、神さまの助けがあるから、私はこうして今、生命があり安泰だけでも、もし神さまが助けていなかったら、私はとうに黄泉よみに下っているだろうということを行います。

18されどわが足すべりぬといひしとき、エホバよなんじの憐憫われをささえたまえり。」

これです。「あつ滑った」と私が心に叫んだ時に、あなたの憐れみが私を支えてくださいました。「天使が支えた」とは書いてません。けれども、人生で失敗した時、しくじってしまった時、その時でも、

「ああ、もう、いかん。だめだ」

と思った時でも、ちゃんとあなたの憐れみ、あなたの慰め、そういつたものが私を支えてくださいました。とことんだめになってしまわなかった。立ち直れないほどにまでたたきつぶされないで終わりました。支えていただきましたと。そして更に、

19わがうちに憂慮のみつる時、なんじのなぐさめわがたましいを喜ばせたもう。」(詩篇94・17、19)

と。詩篇というのは、こういう讚美、祈りがキラキラキラと輝いているんですよ。詩篇というのは昔の人たちの歌です。讚美の歌。詩篇というのは讚美と祈りの書だと私は思っています。讚美歌集と言ってもいい。その詩篇の中にこういうキラキラキラキラ輝いている言葉があちらこちらに散りばめられています。それを私はたえず発掘して、

「あつこれは私の心にピタリだ」

というのを全部拾い上げている。そして、私の祈りそのものにしていく。自分が祈りたい時に、どうやって祈つていいかわからない。その時に詩篇を借りてくるんです。そして、

「詩篇にこんなことが出てきます。私もこの気持ちがよくわかります。主よ、私の足が滑った時でもあなたは必ず支えてくださいね。どうぞお願いいたします」

と、そういう形で、詩篇といったものを抛り所にして私の思いを神さま、キリストにお委ねするという、そんな生活を私はしております。

「わが足すべりぬといひしとき、エホバよなんじの憐憫われをささえたまえり。わがうちに憂慮のみつる時、なんじの安慰わがたましいを喜ばせたもう。」



と。こんな讚美の歌を読んでいますと、何だかうれしくなってきましたですよ。なにか朗らかな暖かい気持ちに包んでくれますね。それが私の感想なんです。

旧約の中の福音

それから、詩篇103篇。これは旧約の中の福音そのものだと言われているところですよ。これは非常に幅が広い。いろんなことを歌っています。

「^{たましひ}わが靈魂よエホバをほめまつれ。わが衷^{うち}なるすべてのものよ そのきよき^{みな}名をほめまつれ。²わがたましいよエホバを讚^ほめまつれ。そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。」

まず、神を讚美しよう。まず讚美だ、感謝だと。そこからスタートします。私はやはり、朝起きた時でも——皆さんはどんなふうに朝起きて、お祈りなさいますか——私は、

「ああ、朝を迎えさせてくださってありがとうございます。実は昨夜はよく眠れませんでしたけれども、とにかく朝を迎えさせてくださってありがとうございます。今日は、今日一日、どうぞよろしくお願いいたします。」

と祈ります。これが私の神さまに対する朝のご挨拶なんです。皆さんはいかがですか。この詩篇103篇も、

「^{たましひ}わが靈魂よエホバをほめまつれ。わが衷^{うち}なるすべてのものよ そのきよき^{みな}名をほめまつれ。」

私の内なるすべてのものを五臓六腑といいます。それを総動員して神さまを誉め讚えようと。

²わがたましいよエホバを讚めまつれ。そのすべての恩恵^{めぐみ}をわするるなかれ。

と。そうなんです。我々はいろんな恵みを受けて来ている。それをまず思い起こして、讚美・感謝を捧げようと。そして、非常に根源的なことが次に謳われています。

³エホバはなんじがすべての不義をゆるし汝^やのすべての疾^{やまい}をいやし。

これはとんでもない恵みですね。すべてのマイナス、神に対する不義——罪と言ってもいい——神に対する誤った在り方、それを全部赦してくださいっているという。それから病までも根源的に癒してくださいっている。これはレビ記か申命記か、モーセの書の中に、

「われは汝^いを癒^{いや}すものなり」(申命記32・39)

という言葉が出てくる。神さまは決して我々に病氣そのものを与えて苦しめようなんて思っていないしやらないはずですよ。いろんなことが原因で不治の病に罹^{かか}つたりとか、そういうことがいろいろあります。人間の現実には。しかしながら、根源的に神さまは我々に生命を与え、癒しを与えてくださる、そういう神さまである。だから、たとえ肉体的には不自由なところ、病めるところがあっても、内なる人としては常に健やかであり、常に神を讚美している、感謝している、そういう魂でありたいですね。



すべての不義をゆるし汝のすべての疾をいやし 4 なんじの生命をほろびよ
り贖いだし、仁慈と憐憫とを汝にこうぶらせ、⁵なんじの口を嘉物にてあ
かしたもう。斯てなんじは壮きて驚のごとく新になるなり。」(詩篇103:1~5)

この言葉を見ますと、イザヤ書40章の言葉を思い起こします。

「なぐさめよ、汝等わが民をなぐさめよ」(イザヤ40:1)

という慰めの言葉から始まって、そして、

「エホバを俟ち望むものは新なる力をえん。また驚のごとく翼をはりてのぼ
らん。走れどもつかれず歩めども倦ざるべし。」(イザヤ40:31)

という、非常に強い励ましの言葉がイザヤ書40章に出てくる。

キリストというプレゼント

それを思い起こすような内容が、この103篇のこの出だしのところでは

「なんじは壮きて驚のごとく新になるなり。⁶エホバはすべて虐げらるる者の
ために公義と審判とをおこないたもう。⁷おのれの途をモーセにしらしめ、お
のれの作爲をイスラエルの子輩にしらしめ給えり。⁸エホバはあわれみと恩恵
にみちて怒りたもうことおそく、仁慈ゆたかにましますせり。」(詩篇103:5~8)

憐れみとか、恵みとか、慈しみというのは、これは全部、さつき申した因果応報ではあり
ません。正しい者に対して正しい報いがくる。これは当然なんです。正しい働きに対して
は正しい報酬が与えられる。これは当然です。でも、恩恵とか仁慈とかいいうのは、それに
価しない者であるにもかかわらず、それを上げるよというプレゼントなんです。「恵み」と
か「恩恵」という言葉が出てきた時は、これは本来なら受ける資格のない者に対して、
「でも、私の心だよ、受けとってくれよ」

と言って、プレゼントとして差し出されている。それが「恵み」であり、「真」という。

「律法はモーセによって与えられたけれども、恵みと真はイエス・キリスト
によって来るなり」

という、あそこをそんなふうを受けとってほしい。モーセの世界は律法の世界で——善い
者には神さまはご褒美をくださる。悪い者には処罰がいくという——こういう人間として
当たり前のことを言っているだけです。それがモーセの世界だった。しかし、そのモーセ
の世界では誰も生きていけない。パウロですらだめだった。ルターもだめだった。神さま
の義というただしさの前には、人間はとてでもないけれども立てない。

それに対して、キリストを通して恵みとまことがやってきた。「まこと」は生命と言って
もいい。そういう「恵み」というのは、価しない者に、

「でも、上げるよ」

というプレゼントです。プレゼントというのはお金で買えるものではない。無償で差し出



してくれる。それがプレゼントでしょ。神さまはイエス・キリストというプレゼントをくれた。イエス・キリスト自身がプレゼントなんです。

「そんな！ ただでもらっていいんですか？」

「いいんだよ」

「どうして？」

「あなたのマイナスはこのプレゼントであるキリストご自身が、もう既に背負ってしまわれたんだから。あなたには背負いきれないだろ。あなたは自分で自分の始末ができるの？ 神さまのように償いつぐなができるの？」

と。それは一生かかったってできません。それをキリストは全部引き取ってくださった。

「だから、あなたのマイナスはもう思わなくていい。キリストは生命というプラスをくださり、そして、本当に生きてほしい。あなたは本当に神の生命に生きて輝いて、本当の幸せの人生を送ってほしい」

と。これが御意みこころなんです。我々を苦しめて、あえぎあえぎやらせて、そして最後にだめという、そんなことを願っていらっしやらない。

「若やぎて驚のごとく新あらたになるなり」

と。そういう生き生きと、たくましく健やかに生きていく、そういう生命の世界をキリストはもたらしてくださった。そして、マイナスは全部、ご自身が背負っていらっしやる。そういう神さまのプレゼントとして、キリストがこの地に遣つかわされていらっしやった。

独り子だけ

「律法はモーセによって与えられたけれども、恵みと真まこととはイエス・キリス

トによってきたるなり」

というヨハネ伝一章と、もう一つヨハネ伝は大事なことを言っています。

「まだ神を見た者はいない。誰もいない。ただ、神の懐ふところにおられた独り子なるこのお方だけが神を顕した」

と。二つのことをあのヨハネ伝一章は言ってくれている。

「律法はモーセによって与えられ、恵みと真はイエス・キリストによってやっ

てきた」

ということと、

「まだ神を見た者は誰もいないけれども、このイエスというお方こそが神を顕

している」

ということ。だから、

「私を見た者は父を見たのである」

と、キリストは言いました。私たちは、「神を見たい。神を見たい。神はどんな方？」なんて、



想像はします。けれども、わからない。特にイスラエルの宗教は、

「偶像を造つてはいかん」

「見えない神さまが見える形に造つてはいかん。どこまでも、見えない神をそのまま信じる」

と言っておられる。そのお方がイエス・キリストという見える方を我々にくださった。ここに神が顕れているよということ。つまり、

「私という見えない神がこのキリスト・イエスという方の中に全部顕れている。形をとつた具体だよ」

と。見えない神さまが見える形で顕れた。

「さあ、これを信じる、これを受けとれ」

と言って、プレゼントとして我々の前にキリストを差し出してくださいました。ありがたいではありませんか。そして、その方は、福音書を見てごらん下さい、善いことばかりなさい、病人を治してあげたりとか、苦しんでいる人を慰めてあげたりとか、いいことばかりなさいしている。そして最後は十字架でしょ。

何のための十字架か

何のための十字架か。あのお方自身には何も原因はない。モーセの律法によつたら、キリストこそはサーツと天国へ行ってしまうお方です。というのは、律法の源である神さまご自身をあの方は受けとつていたから。人々は律法に縛られていた。

「律法を守らなければいかん」

と、いつのまにか律法を与えた律法の源みなもとである神さまなんかどこかへ行つてしまつて、

「律法を守らなければいかん、守らなければいかん」

と、それで汲々としていて、非常に冷たい心になつてしまつて、愛が消えていった。規則づくめの世界です。でも、キリストは、「恵みと真」ということで、がんじがらめに人を縛るかに見えている律法の源の神さまは、本当は生命をくださるお方なんだ。だから、律法の世界を突き抜けて、源である神さま自身と一つになつてしまつた。そうすると今度は、律法が生きてきたんです。

「律法は人を活かすものだ」

と、パウロもローマ書の中で言っている。人に生命を与えるべき律法が私にとつては私に死に追いやるようになった。なぜなんだ。聖なる律法が、なぜ私を死に向かわしめたか。いや、それは律法が悪いのではない。私の中に巣くっている「罪」というやつ、反逆の心、これが律法に逆らつた。だから、私は二重人格だ。心の中では神の御意みこころを行いたいと思つていながら、実はもうひとり別な私がついて、それが罪というやつで、これが神さまに逆らう。

「ああ、われ悩める人なるかな。この死のからだ」



と、ローマ書7章で言っています。そのようにして本来、律法というのは人を活かすために与えられた律法であったのに、それが今度は、人を縛って死に追いやるような働きをしてみました。それに対してイエスという方は、その律法を突き抜けて、神さまそのもの一つになっていらつしやるから、律法は人を活かすものとしてキリストは使っておられます。安息日に人々は絶対に働かしてはいかん。病を癒すというのは働かだから、これはいかん。こういう律法に対して、キリストは平然と安息日にいろんな人を癒されました。

「神さまの御意は人を活かすことだ。安息日は神さまから恵みを受けるために人のわざを休めと言われている。人のわざを休んで神さまの恵みを100%に受ける、これが安息日という律法だ。だから、私が安息日に、苦しんでいる人たちを癒してあげて何がわるいか」

と言って開き直られたら、律法学者たちは「律法に違反する」と言った。しかも、イエスは、自分は神と等しい、

「私を見た者は父を見た」

と言われた。神を冒瀆する罪として安息日という律法を破った罪、それでイエスを十字架にかけた。救われた民衆までも煽動されて、

「十字架に付けろ、十字架に付けろ、バラバを赦せ」

なんて言って、最後はキリストは十字架です。しかも、その十字架をキリストは、

「人々が私を十字架に付けるのではない。私はみずから十字架にかかるんだ、

自ら棄てるのだ」

と、ヨハネ伝の10章ではつきり言っておられます。

「あなた方のせいではない。私は自ら十字架にかかるんだよ」

ということも言っておられる。キリストという方は本当に素晴らしいお方です。

神さまの護り

要するにこうやって、詩篇103篇8節、

「⁸エホバはあわれみと恩恵にみちて怒りたもうことおそく、仁慈ゆたかにましませり。

と、こんなことは旧約ではなかなか言えないと思います。私が見た旧約は、非常に律法が貫いていて、厳しい世界で、神さまは審判の神さまとして臨んでくる、そういう印象があるけれども、ここでは、

⁹恒にせむることをせず、永遠にいかりを懐きたまわざるなり。

なんて、そんな突き抜けたことを言っています。そして、

¹⁰エホバはわれらの罪の量にしたがいて我儕をあしらいたまわず、われらの不義のかさにしたがいて報いたまわざりき。¹¹エホバをおそるるものにエホバの



賜うそのあわれみは大にして 天の地よりも高きがごとし。¹²そのわれらよ
 り窓をとおぎけたもうことは東の西より遠きがごとし。¹³エホバの己をおそる
 者をあわれみたまうことは父がその子をあわれむが如し。

まあ本当に福音そのものですね。

¹⁴エホバは我儕のつくられし状をしり われらの塵なることを念い給えばな
 り。¹⁵人のよわいは草のごとくその栄は野の花のごとし。風すぐれば失てあ
 となくその生いでし処にとえど尚しらざるなり。

と。熱風が吹きますと、植物は枯れてしまう。そういうのがそれまでの旧約の世界であり
 ましたけれども、

¹⁷然はあれどエホバの憐憫はとこしえより永遠まで エホバをおそるもの
 にいたり、その公義は子孫のまた子孫にいたらん。¹⁸その契約をまもりその
 訓諭を心にとめて行うものぞその人なる。」(詩篇103・8～18)

こんなふうには、あの旧約の中にあつて、この103篇は本当は、

「神さまの御意というものは人を生かすものだ。人を生かしてやまない、命をくだ
 さるのが神の本当の御意だ」

ということを語ってくれています。そういう意味で、神さまの護りというものの一つの拠
 り所として、これを持ってきてきてよろしいと思っております。

われ山にむかいて

それから、詩篇121篇ですが、また京都のお話になりますけれども、私たちの集会所があ
 る所は、その東側に鴨川が流れていて、そのかなたに東山があり、そして左手の方に比叡
 山があります。山が近くて川が流れて、ということ、非常にこの121篇と通じるところが
 ある。ですから、私たちは讚美歌301番の「山辺にむかいて」を京都キリスト召団の召団歌
 にして、ずっと愛唱してきました。

「われ山にむかいて目をあぐ。わが扶助はいずこよりきたるや。²わがたす
 けは天地をつくりたまえるエホバよりきたる。³エホバはなんじの足のうごか
 さるるを容したまわず。汝をまもるものは微睡たもうことなし。⁴視よイスラ
 エルを守りたもうものは微睡こともなく寝ることなからん。⁵エホバは汝を
 まもる者なり。エホバはなんじの右手をおおう蔭なり。⁶ひるは日なんじをう
 たず夜は月なんじを傷じ。⁷エホバはなんじを守りてもろもろの禍害をまぬか
 れしめ、並なんじの靈魂をまもりたもう。⁸エホバは今よりとこしえにいたる
 まで汝のいづると入るとをまもりたもう。」(詩篇121・1～8)

「四六時中、エホバの神さまの護りは確かだよ。絶対、あなたは護られているから
 大丈夫だ。だから、安らかに眠りなさい」



と。そういう約束の詩なんです、この詩篇121篇は。

さつきも申しましたように、私たちは、山がすぐ近くにあります。比叡山という山があります。だから、この

「われ山にむかいて目をあぐ」

というのは非常にピッタリくる。そして生命の川が流れています、鴨川が。そして、キリストの湯があります。鴨川温泉がある。そういう地理的にも自然的にも、私は京都のとても良い所に居を構えている。ここは昭和41年(1966年)からですからもう50年以上になります。

そして、そこを私は住み処^かとして賜ったときに、小家族にはやや広い家だったから、ここを絶対に集会所にしようと思った。もうその時に決めました。防音設備とかいろいろなことをやりました。なにせ、その頃の祈りというのは凄かった。みんな

「ウワーツー！」

と大声で祈っていましたから。それは近所から苦情が出てくる。しかも夜中に祈るわけです、12時ころ。すると、ドンドンと音がして、

「オーイ、お前ら何時だと思ってるんだ！」

と言って怒鳴りこまれる。左右から怒鳴りこまれる。でも、静かに祈れと言ったって、そのころは小池先生も、若い者たちもみんな大声で祈るのが習慣になっていた。それに感染した者が大声で祈るんです。だから、対応は二つある。祈りを止めるということ、もうひとつは祈りはそのままにして防音装置をする。どっちを選ぶか。防音装置を選んだ。そういうようなことを思い出しますが。やはり、私たちにとって大事なものは祈りなんです。頭ではだめです。祈りなんです。しかも、祈りははらわたの底から叫び出すような祈りでないとだめです。

私は自分の家で大声出して祈りませんから、若王子^{にやくおうじ}の山の上へ行って祈ってききました。特に昭和44年に大学紛争が東大から始まって全日本を被いました。学園紛争です。そのときにまともな授業なんかできない。そのときはただ聖書と讃美歌を引っさげて、若王子山まで2.5キロ走って行く。坂道を50メートルほど駆け上がって、こんもりとした木立の中で大声で讃美歌を歌い大声で祈るんです。やはり、はらわたの底から「ウワーツ」と祈らないといかん。

「主さまーッ！ 神さまーッ！」

とか叫ぶ。バカでなからうかと、そのぐらいでないとだめなんです。正気の沙汰でないんです、神さまの世界は。狂えるがごとくに。それは町の中ではだめです。やはり誰も居ないところに行ってやる。でも居たんです、人がひとり。絵描きさんです。その方と仲良くなつて、その方の絵まで頂いたことがあります。

「あなた方は若いのに、毎朝熱心で感心するよ」



なんて言っただけでほめてくれた。

いや、小池先生なんて凄いですよ。八溝山やみぞという所に籠こもって、古いお寺を借りて、そこで断食して祈った。その下には滝壺たきみたいな所があったそうです。滝浴びされた。断食して祈って、そして滝壺たきに下りて行ってそこでまた祈られたら、みんな異言に変わったという。そういう話をじかじかに聞きました。小池先生も、1950年に聖霊のバプテスマを受けられてから凄く燃えておられたので、その頃のお弟子さんたちはみな鍛えられた。そういう自然なカタチで断食したり祈ったりとか、そういうことをなさっていた。それは、しようと思っただけでやられたのではなくて、しようがなくなつたんでしようね。滝壺たきに入ったらみんな異言で讚美したとか言っておられました。

まあ、私はあまりそんな凄いことは何もしてませんが、せいぜい山の上で大声で祈る。はらわたの底から声を出すという、そういうことをやはりなさつたらよろしいと思います。自分を捨ててしまふ。自分を全部出してしまふ。そして、自分がいかにも空っぽになつたような気持ちにさせられて、そしてら神さまの霊たまが降くだってくるという、そういう感覚です。教会の中で縮ちぢこまつて祈っていても私はだめだと思ひます。

「火」という字は、人が手を上げて祈っている姿だそうです。小池先生も時々、目を開いて天に向かって両手を上げて祈っておられました。我々はやはり自然の中に生きていますから、太陽を浴びて大空のもとで本当に自分自身がまるで天と地をつなぐような姿の形になつて、そして大声で目を見開きながら、「ウワーツ」と祈るといふ、そういうこともよろしいのではないのでしょうか。都会の中ではなかなかできませんけれども、そういうことも皆さんはなさつてくださいな。

キリストとのコミュニケーション

それから今度は、新約聖書に行きます。「主の祈り」というところ。弟子たちが「祈ることを教えてください」と。あのバプテスマのヨハネは弟子たちに祈ることを教えたそうです。それに対してキリストはあまり仰うやつていなかったのかな。それで、弟子たちが、

「ヨハネが弟子たちに祈りのことを教えました。私たちにもどうぞ祈りのことを教えてください」

と、お願いしたというのが出てきています。マタイ伝の6章のところですよ。

「隠れた所で祈れ」

と仰うやつた。当時のパリサイ人びとというのは、これみよがしに自分の義ただしいと信じている姿を人に見せびらかした。施しをする時にもラツパを鳴らして、さあこれから施しをするから見なさいといつて施しをするとか。祈る時にもそうやって大声で辻の角で祈るとか、そんなことをやっていたらいい。ところが、キリストはそうではない。

「隠れたことを見ていらつしやる、隠れた所にいらつしやる隠れた神に祈れ」



と仰った。

「⁶なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて隠れたるに在す^{いま}汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給う。⁷また祈るとき、異邦人の如くいたずらに言を反復すな。彼らは言多きによりて聴かれんと思うなり。⁸さらば彼らに效うな、汝らの父は求めぬ^{さか}前に、なんじらの必要なる物を知りたもう。」(マタイ6・6〜8)

と。このように神さまは全部ご存知なんです。では、ご存知だったら祈らないでいいのか。そうではない。ご存知だけれども、それを言葉に、声に出してお祈りする、お願いする。そしたら、それに応える形でそれが報われる。それによって神さまとのコミュニケーションができるんです。繋がりができるんですよ。神さまの方ではすべてご存知なんですけれども、やはり神さまの側では私たちとのコミュニケーションを願っていらっしやると思うんです。

だから、私は聖書の言葉を読むときでも、キリストの言葉がヨハネ伝に出てきますね、「ああ、主さま、そうです、本当にそのとおりです。私はこれを読んだら、もう感動で魂が震えますよ」

なんて、勝手に聖書を読みながらキリストとコミュニケーションをやっているという、そういう感覚で聖書の言葉を受けとっている。祈りもそういうことではないでしょうか。

「汝らの父は求めぬ^{さか}前に、なんじらの必要なる物を知りたもう」と。だからこそ、

「主よ、あなたはご存知でしょうけれども、私は今、これがなくて困っております。どうぞ、お与えください。私は知恵がなくて困っています。私はこんな論文を書かなくてならないのですけれども、なかなか知恵が湧いてきませんので、どうぞ知恵をください」

と。人の知恵をパクってきたら、これは論文でもいけないそうですね。コピペ(コピー&ペーस्टの略)とかいうのがありましてね、そういうのはよくないらしいけれども。神さまから知恵を探りだす、聞き取りだす、これはよろしいんですよ。

「キリストの中にはあらゆる知恵と知識の宝が埋蔵されている」とコロサイ書に出てきてます。だから、私は自分の、クリスチャンで学者になろうとしている弟子に言いました。旅行に一緒に行ったときに、朝6時ごろに二人で祈った。

「コロサイ書に、『イエス・キリストの中に知識と知恵の宝が隠されてある』と御言にあります。どうぞ、私たち学問に携わる者にあなたの無限無量の知恵と知識をお授けください。私たちは自分の乏しい知恵知識ではとてもまともな論文も書けません。けれども、どうぞ、あなたの知恵、知識、悟りをお与えください。そうすれば、私は人並みにちゃんと論文も書くことができるんですから」



と、そういうお祈りをしました。それはなんにも間違ったことをしてないと思う。人さまの知恵を盗み取ってきたら、これはいけません、黙って盗んできたなら。取ってくる場合には必ず出典はどこだということを言わないといけない。でも、神さまからもらったものを「出典キリスト何時何分」なんて書いたら、それこそ「あれおかしんじゃないか」なんて言われますからね。

やはり、私たちは絶えずそうやってキリストと我々がコミュニケーションをやつてますと——私は時々、鴨川の土手を一人でジョギングなんかしている時に、閃きひらめをいただいたように思うことがあります、錯覚かもしれないけれども——なにかそうやって、ひとりの時間をつくつて、ひとりの時間るときに相手はキリストさまだという形の時間をつくつていきますと、なにかいいことがあります。皆さんも、満員電車で身動きできないような時でも目をつぶつて吊り革にぶらさがりながら沈黙で祈ることもできますよ。

主の祈り

この「主の祈り」ですね、あなた方はこのように祈りなさいと。

「⁹この故に汝らは斯く祈れ。『天にいます我らの父よ、願わくは御名の崇められん事を。¹⁰御国の来らんことを。御意の天のごとく地にも行われん事を。』

¹¹我らの日用の糧を今日もあたえ給え。¹²我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。

その次です。

¹³我らを嘗試しじろみに遇わせず、悪より救い出されたまえ」(マタイ6・9〜13)
これです。試練はいろいろやってきます。その試練は乗り越えて行かなければいけない。

でもあえて、「試練を与えたまえ」なんて祈る必要はありません。昔の武将で山中鹿之助というのが

「我に艱難辛苦を与えたまえ」

と祈つたららしいですけれども、そんなことを我々は進んで祈る必要はありません。放つておいたつて来ますから。

「我らを嘗試しじろみに遇わせず、悪より救い出されたまえ」という。この「悪より」というのは、サタン的な「悪しきものより」ということと、「悪そのものの、災い」ということの両方あると思います。そういった、

「災いからも守つてくださり、それから悪しき霊からも守つてくださり」

という、この二つがこの祈りの中に込められていると思います。ヨハネ伝15章7節に、

「あなた方が私とつながっており、私の言葉があなたの中に宿かっているなら、何でも必要なものを求めなさい。そうしたら叶かなえられるから」

という、それがヨハネの15章にあります。



「⁷汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望^{のぞみ}に随^{したが}いて求めよ、さらば成らん。」(ヨハネ15・7)

と。条件は、あなた方が私の中に宿っているということ。

「私の言葉が

言葉とキリストという本体は一つですから、キリストの霊なる言葉が、

あなたの中に息づいているならば、そしたら何でも手当たり次第に求めてごらん。

必ずそれは成るからね」

というすぐくありがたい約束です。ヒルティは『眠られぬ夜のために』の中でここを引いて、

「これが本当ならば、自分たちはもうこの世で恐いものなしだ」

と言っている。それくらいこの15章7節というのは素晴らしいとヒルティは絶賛しています。

悪しきものの手

これを引いて、ヨハネの第一の手紙5章にとでもうれいことが書いてあります。14節、

「¹⁴我らが神に向かいて確信する所は是^{これ}なり、即ち御意^{みこころ}にかなう事を求めば、

必ず聴き給う。

さっきのヨハネ伝15章7節は、「あなた方が私としつかりつながっており——つまり私とあなたが一つであり——私の言葉があなたの中に息づいているならば、何でも願い求めなさい。そしたら、必ず成るから」ということを言われた。それを受けとって、

¹⁵かく求むるところ、何事にても聴き給うと知れば、求めし願いを得たる事を

も知るなり。」(ヨハネ一5・14〜15)

と。非常に論理的でしょ。求めたら必ず聴かれると、そういう約束がある。そうすると、

「現象としてそれが現れてこようが来まいが、もう求めたことは既に得たりと、既に先取りしなさい。願い求めたら必ず成るんだから、もう得たりというふうに確信しなさい」

と、そういうことを言っています。それからとびまして18節、

¹⁸凡^{すべ}て神より生まれたる者の罪を犯さぬことを我らは知る。神より生まれ給い

し者、

これはキリストのことです。

¹⁸これを守りたもう故に、悪しきもの触^ふるる事をせざるなり。」(ヨハネ一5・14〜)

つまり、キリストの護りがありますと、悪者は近づけないよと。キリストが防波堤となって、護りの膜をもって防御してくださる。そういう約束です。

「神より生まれ給いし者、キリストさまが、その神より生まれたクリスチャンを守



つてくださるから、悪しきものは手を触れることができないんだ」
 と。そこでよく私は思い出すけれども、どこか山の近い所で夏の特別集会があった。夜、小池先生は半袖で外に出ておられていたので、私は聞いた。

「先生、その半袖姿でこんな所にいたら蚊がきて刺しますよ」

「いや、奥田君、蚊は刺さないよ」

「なんでですか？」

「聖霊という膜が張っている。聖霊が私の身体全体を覆っているから、蚊は刺せないんだ」

と本気で仰っていました。へえーと思つてね。いや、それくらいにやはり先生は、聖霊の護りというかな、聖霊というお方と一つの気持ちでいらつしやるんだなということをしみじみ感じました。我々だったら、蚊がくるなら、蚊が刺さないような何か薬を塗るとか、そんなもので考えるでしょ。ところが先生は、聖霊の膜が覆っているから蚊は刺せないと言う。このヨハネがそれなんです。

「神より生まれ給いしお方、キリストが膜を張ってくださいっているから、悪しきものは触れることができない」

と。よく、鹿の害とか猿の害を防ぐためにフェンスに電流を流して近づけないようにするのがありますね。そこに人間が触れて怪我をするとかいう話がありますが。そういうふうな聖霊の膜が小池先生を護っている。今度は我々は、キリストという方がそうやって膜を張ってくださいるから、悪霊が近づけない。悪しきものが近づけないという約束がここにある。

御言の約束

私たちはこの聖書の中から自分に有利になるものをどんどん使いこなす。これは裁判でも手なんです。いろんな証拠があります。有利な証拠は全部出す。不利な証拠は相手方が出してくる。これがどうも裁判の構造みたいです。本当は有利も不利も全部出すのが正直なんでしょうけれども、裁判はどうしても勝ち負けということになるから、自分たちに有利なものを出していく。不利なものは出さないといいことですから、自分たちに

私たちクリスチャンは、聖書という万人が共通に持っているこの宝物の中から自分に有利なものをどんどん引っぱり出して、

「いいですよ、これですよ」

と。御言を出してきたら、神さまといえどもやはりそれを破つてはいけません。神さまは自分の言葉に忠実でなければいけない。だから、勝手を願いで祈っているのではなくて、

「御言はこうです。この御言はこんなふうにあなたのお約束です。ですから、御言とおりになさってください」

「しようがないな」



と、神さまの方は。そうでしょ。だから、私はよく言うんです。

「新約聖書、これは私の宝物です。ここに私に有利なことが全部書いてあります。ここから有利なものを全部引っぱりだして、神さまに、『そうですね。そうなんですよ。ね、お願いしますよ』と言ったら、『しょうがないな』ということで聴いていただける」

と。「神の護り」と題しましたけれども、結局、神の護りというのは、聖書の中でどんなお約束が我々に与えられているか。キリストご自身はどんなふう生きておられたか。キリストご自身は逆巻く嵐の湖の舟の中でスヤスヤと眠っておられた。我々はキリストというお方の護りがあれば、どんな所に行ってもスヤスヤと眠れるのが本当なんです。

でも、我々は不信仰なことが多いですから、ついつい心配する。そのときに、この聖書の中から自分に有利な材料を全部引っぱりだして、それで武装するんですよ。そして、いろんなことが起きたら、これに対してはこれをもって立ち向かう。こつちがきたら、これをもって向かうという、何か碁や将棋の勝負みたいに、相手の出方次第によっていろんな御言を使いわけていくという。まあそういうふうにして、自分たちは神さまの護り、具体的にキリストの護り、絶大なる御力による護りの中で我々は生きていく。これがキリストのお約束だということですよ。

永遠の生命

それから、もうひとつ言います。

「それでは、絶対に災いにあわないか」

と。そんなことはありません。大津波が来たらみんな、善人も悪人も全部一斉に流されて命を奪われます。キリストは何と言っておられるか。マタイ伝やルカ伝の中で、

「身を止ぼすことができても、魂を止ぼすことのできないものたちを恐れるな。」

身を殺したのち、魂をゲヘナの火に投げ込む権威ある方を恐れよ」

神さまですね。そして、

二羽の雀は一銭で売られている。あなた方は雀よりもはるかに優れたもので

ある。あなた方の髪の毛の一本一本全部が数えられているぐらい、あなた方の

のことは神さまに大事に思われている。だから、心配するな」(マタイ10・28)

31、ルカ12・4〜7)

と、そういう約束がちゃんとある。ですから、私はこう思っているんです。

「このような護りの約束がありながら、それでいながら、私が仮に津波にさらわれて肉体が亡びましても、私の霊は翼をいただいて天に昇っていく。絶対、天に昇っていく」

と。だから、



「私たちには護りの約束があるから、私たちは火の中であろうと水の中であろうと、絶対流されることもなくて常にピンピンしている」

と、そういうことではありません。キリストは仰った。

「たとえ全世界をもうけても、自分の生命を失ったら何にもならない」

と。その「自分の生命」というのは「霊なる生命」なんです。肉体は亡びます。我々ほとんどにピンピン元気がよくても120歳が限度のようですね。まだ116歳でしょ、今のところ。もうだんだん皆さんは近づいていらしゃるわけですよ。私なんかもだんだん近づいています。そういう朽ちる身体にしがみついてはいけません。朽ちる身体の中に、朽ちない永遠の生命、これをキリストはくださった。この永遠の生命は、この外なる人が亡びても、これは輝いてやまない。これが本ものなんです。キリストの復活の姿がそれを顕しています。

キリストの復活

キリストの復活の姿を私はなぜ信ずることができるかと言いますと、キリストはペテロ、ヨハネ、ヤコブという三人の弟子を連れて山へ登られて、祈っておられたら、眩い姿まばゆに変わっている。それは十字架の相談をなさっていた。どういうふうにしてキリストがこの世を去られるかということについて語りあっていたと書いてあります。でも、ペテロ、ヤコブ、ヨハネはもう驚いてうわのそら。ペテロは、

「ここに小屋を二つ造りましょう。一つはあなたのため、一つはモーセとエリ

ヤのため、一つは我々のため」

とか、うわ言を言っていた。すると、雲が覆おおつて、モーセとエリヤは見えなくなった。イエス・キリストお一人だけがそこに残られた。そういう場面が出てきます。

あれなんです。キリストは本気で祈っておられますと、眩い姿まばゆに変わるだけの質を持つておられた。そのお方がわけあって地獄に突き落とされた。それは我々のマイナスを全部背負った。我々の罪、咎とが、神の前に出られない我々のマイナスを全部、自分が引かぶつ被かぶつて、自分が地獄に墮おちてくださった。そして、地獄で悩んでいる者たちまで引き連れて天に昇って行かれた。これがキリストの復活という事態です。

それは、キリストの肉の命がもう一度もとに戻ったのではない。霊のからだ、霊体となつて、山上で祈っておられたときの眩い姿と同じ姿で今度は顕れてこられた。そして、やがて天に昇って行かれた。これがあの「復活」ということと言われている事態なんです。

ラザロは、復活したのはもとに戻っただけです。ラザロは墓に葬られて四日もたって臭くなっている。けれども、キリストは祈つて、

「ラザロよ、出てこい」

と言われたら、ラザロは出てきた。これは凄いことです。こちらの話は奇蹟も奇蹟、大奇



蹟です。でも、それは元のラザロになっただけであって、永遠の生命のラザロではない。でも、キリストの復活という事態は、霊体となって永遠の生命そのものとなって甦れられた。そして、霊の体、御翼をもって天に昇って行かれた。そして、

「今度は、あなたたちを私と同じ姿に変えるよ」

というのがキリストの約束です。

「永遠の生命をくださる」

というのはそういうことです。肉の身体は亡びても、亡びた後にそこに亡びないものがあるやんと出来上がっている。その出来上がっている姿はやがて御翼をいただいて天に昇って行く。

ですから、どんな大地震があろうと、どんな災害でこの身体が亡びようと、亡びないものがあるやんと内に来ている。亡びないものが来ている。それはキリストの生命なんです。キリストの生命は必ず爆発して、翼をいただいて天に昇っていく。天に昇らざるを得ない。そういう約束なんです。ですから、神の護りがあるから地上で絶対安泰なんてことはなにも約束されてません。地上は最後の世界ではないからです。

「あなた方は地上では**艱難**がある。でも、雄々しかれ、我すでに世に勝てり」

とキリストは仰った。「世に勝てり」と仰ったキリストは、身体は十字架で裂かれました。血を流された。しかしながら、復活のああいふ栄光の姿で甦れてくださいった。

私たちはこの身体を脱ぎ捨てますと、あるいは墓場で焼かれますと、私たちの見える姿は消えます。けれども、その背後に見えない霊体というものがちゃんとそこに出来上がって、それが天に昇っていく。既に召されていった者は——小池先生をはじめ、いろんなクリスチャンで天に昇っていった人たちは——みんなそういう姿で天上で輝いているはずで、見えないだけです、私たちには。

見えないものを見つめていく

私たちは、見えないけれども、見えないものが見えるがごとくにしっかりと見つめていくという、これが信仰という事態なんです。ヘブル書11章のところに、

「**それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。**」(ヘブル11:1)

とあります。望むところ、まだ見てないもの、それを「然り」と、現実としてしっかりと受けとっていく。これが信仰ということ。キリストというお方がご自分のあの眩い姿、あの同じ姿を私たちに約束してくださっています。だから、

「たとい外なる人は亡びても、内なる人はいよいよ新たなり」

とコリント後書4章の終わりに出てきます。

私たちはこの自分の肉体をこの現世で絶対に守ってくれなくて、それにこだわったらだめです。自分でピリオドを打つことは絶対にいけません。それはいけません。御旨のままに



委ねないといけない。けれども、たとえ何が来ようとも、必ずこの地上での命の役割が終わったならば、この見える身体が亡びる時には、必ず見えない本当の生命が本ものの姿を顕して、そして行くべきところへちゃんと導かれて行く。そういう約束をいただいていますから、これは絶対に揺るがないですよ。これが揺らいだらもう神さまはいない。神さまというお方がいらつしやるかぎりには、その言葉にウソはない。神の言葉に偽りはない。神は真実なお方ですよ。真実なお方がウソをつくはずがない。そういうことです。

ですから、我々は、見えるところではなくて、見えないものをちゃんと見つめながら、そして現世を一步一步踏みしめて歩いていく。これが私たちの生きざまでなくてはならないと思います。

私がよく夕方に鴨川の土手をジョギングする時はもう暗くなります。そうすると、懐中電灯を持って行く。懐中電灯で足下を照らす。懐中電灯はわが路の灯火。では、光は？

「あなたの御言はわが足の灯火、わが路の光なり」

と詩篇に出ています。足の灯火は懐中電灯。では、光はどこにあるか。向こうには橋があって、ちゃんとランプが灯っている。それがこつちを導いてくれる。遠くのランプを見ながら、しかし現実には足下を懐中電灯で照らしながらジョギングする。私のジョギングは常に御言と一つなんです。「あなたの御言はわが足の灯火、わが路の光なり」と。光は向こうに輝いています。その輝いている光に引き寄せられて私は歩んでいく。しかし、歩んでいく一歩一歩はちゃんと照らしていかないと、躓いたり転んだりする。そういう生活をしております。

御言を然りと受けとる

ということ、皆さん、御言の中で生きてください。御言は生命です。そして絶えず我々を支えてくれます。御言を然りとして受けとっていく人間に対して、神さまの方は絶対に責任をとりたもう。

「あそこまで信じている者を裏切ったら、わたしの名がすたる」

と。そういうのが神さまですよ。だから、「本当かな、うそかな」なんて、そんなことではいけません。絶対にそうだと。子どもさんだってそうでしょ。親が、

「今日の日曜日はどこどこへ行く」

と約束して、その日になったら、

「実は上司からゴルフに行こうと言われたのでごめんね」

なんて言っても、もう絶対にそんなことは信じませんよ、子どもは。上司が何であれ、

「約束ではないか」

と言って、子どもさんは怒っているはずですよ。まあそんなことで、神の子どもたちが御言にすがって、



「あなたの御言はみことばこういう約束です。これにすがって生きてますから」と言ったら、

「わかった。絶対にあなたを守るから、大丈夫だよ」

と神さまが応えてくださる。そういうのが我々の生き方です。それがこの「神の護り」という中で生きる我々の生きざまです。それを一人ひとりの方が実践してくだされば、

「ああ、やはりクリスチャンというのはすごいな」

と。これだけの方があかしびと証人なんです。

「神の言はしか然りである、生命である、力である」

という、それをご自分の生活でいろいろ躰していったら、

「やはり多数がそうだったら、本当かもしれない」

と。そういうことで、神の子らが地上に現れてくれること。それが御意だと思えますから、よろしくお願いします。ではもう時間が参りましたので、これで終わることにいたします。

祈り

ひとことお祈りして終わります。

主イエス・キリストさま。今日は「神の護り」と題して、あなたがくださっている素晴らしい約束を皆さんと共に味わうことができました。この聖書、特に新約聖書という小さな書ですけども、この中にあなたの御言、生命が溢れています。どうぞ、それを日々、私たちはいただいて、あなたと一緒に生活していくことができますように。

「汝はわがものなり、われ汝を悦よろこぶ」

と仰ってくださいるあなたのお約束の中に私たちを導いてください。

感謝してこの祈りを皆様の祈りと共に今、主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げいたします。アーメン。

